文章中における動詞基本語彙の相互関係について

安田女子大学　文学研究科
日本語学日本文学専攻
博士後期課程　　王　世和（オウ　セイワ）

はじめに

日本語の語彙に関する研究の新しい試みとして、表現語彙論の概念が永尾章曹氏の「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」により提起されている。氏は論文の中で、表現語彙論による語彙研究の基本概念について、「語彙の意味に関する研究においても、具体的に言語表現についての研究を試みる必要もある」と述べた上で、言語表現の一実現である「具体的ないくつかの文学作品を取り上げて、その文章表現を対象として、語彙の意味に関する研究ができるかどうか、その可能性を追究してみようとするものである」と、述べている（注１）。

本論文は、語彙研究の可能性を文章表現に求めようという氏の論説の基本概念を受け継ぎ、文章の構成を念頭に置き、文章全体を考察対象として、文章中における動詞基本語彙について行った一つの考察結果である。それにより、表現語彙論の一分野としての「動詞基本語彙論」の研究方向の可能性を探って行きたいものである。

然し、文章全体を研究対象にするといっても、すべての文章と、文章におけるすべての要素を同時に考察するわけにはいかない。文章というのは生きたものであり、作者の恣意性や文章の素材の違いにより、文章の様態が大いに異なってくるに違いない。それらを選別なしに考察すれば、違った性質の要素が混じり入って、客観的な研究結果が望めない。文章構成を重視するという立場からも、あらかじめ考察対象を限定する必要がある。

本論文では、文章に種類があるという認識で、まず考察対象を「事件の話をする文章」に限定した（注２）。また、事件の話をする文章にも文章構成上の多様な要素がある。研究結果を干渉しかねない要素を最小限にするために、事件の話をする文章が成立する上で欠かせない存在としての、主人公の「話の筋」だけに限定し、考察を行うこととした（注３）。その考察

結果としての四種の動詞基本語彙の存在を確認した上で、文章の中で、その四種の動詞基本語彙がどういう相互関係を持っているかを考えてみることを本稿の目的とする。

一、動詞基本語彙の概念と確認

事件の話をする文章の場合、文章の構成上においては、話の筋が最も大切で、且つ欠かせない構成要素として認められる。筆者はすべての事件の話をする文章に共通する特徴を見出そうと思い、主人公の話の筋として、多用される動詞語彙について調べたことがある。それにより、動詞基本語彙が文章に存在するという結論を出している（注4）。ここではまず、その概念について触れておき、『暗夜行路』を用いて、それを確認することとする。

調査の手順として、まず志賀直哉の『ある一頁』『和解』、芥川龍之介の『歯車』から、主人公の話の筋と思われる動詞語彙を全部引き出した後、その使用回数により、動詞語彙を分けてみた。その結果として、一回しか使われない動詞語彙が多くあると同時に、一方、多用される動詞語彙が、多い場合に何と45回も記録していることが分かった。

事件の話をする文章というのは、ある特定の時に、偶然起こった事件を描写する文章である。ある時に、事件の話の主人公が偶然次々と動作を行っていくというので、それらを描写するのに、ある動詞語彙が偶然使われることになる。一回、二回しか使われない動詞語彙が多く使用されることは、偶然の要素が働いた結果として考えられる。一種の自然の結果として受け止められる。しかし、四回以上使われた動詞語彙というのは、主人公が何度も同じ動作を繰り返したことを意味する。偶然ある動作が行われ、偶然ある動詞語彙が使われたというだけでは説明できない。何かがあるかも知れないと思われる。三回使われた動詞語彙は偶然とも何かがあるとも決めかねないので、動詞基本語彙の確定に際して、とりあえず四回以上使われた動詞語彙から手掛かりを探ろうと思ったのである。

調査の次の手順として、四回以上の動詞語彙の、内在した意味に基づいて分類してみた。その結果、「移動語彙・視覚語彙・心情語彙・発言語彙」という四種の動詞語彙が、調査した三つの作品で共通して多用されることが分かった（注5）。事件の話をする文章を構成する上で、欠かせない存在

としての話の筋において、共通して多用されるということで、この四種の動詞語彙を動詞基本語彙として認められると思われた。

ここでは、志賀直哉の『暗夜行路』の前篇と後篇についても、同じ手順で話の筋を調査し、それを構成する動詞基本語彙が上記の動詞基本語彙と一致するかどうかを検証することにより、動詞基本語彙の概念を確認したいと思う。調査したすべての動詞語彙を羅列するのは無理があるので、注目したい四回以上の動詞語彙だけを取り出し、その意味に基づいて分類してみた。表にすると次のようになる。

○多用される動詞語彙の、意味に基づいての分類。（括弧内は使用回数）

	『暗夜行路』 前篇	『暗夜行路』 後篇
移動語彙	出て行った（4）・向った（4）・歩いた（4）・出掛けて行った（5）・来た（6）・入った（7）・歩いて行った（9）・降りて行った（10）・出た（13）・帰って来た（15）・行った（20）	乗った（4）・歩いた（4）・入って行った（4）・廻った（5）・向った（5）・歩いて行った（6）・帰って来た（14）・出た（14）・行った（15）
視覚語彙	眼を覚ました（7）・見た（10）	見た（8）
心情語彙	気になった（4）・心づいた（4）・迷った（5）・気もした（8）・気持になった（9）・憶い出した（15）・感じた（32）・考えた（32）・気がした（43）・思った（108）	気になった（4）・気もした（4）・憶い出した（5）・気がついた（7）・気持になった（9）・考えた（23）・感じた（26）・気がした（32）・思った（97）
発言語彙	訊いて見た（5）・話した（7）・云った（35）	訊いてみた（4）・話した（6）・答えた（6）・云った（69）
？ 語彙	聴いた（4）・書いた（11）	頼んだ（5）・書いた（5）・笑った（8）

表を見て分かるように、『暗夜行路』の場合でも、殆どの多用される動詞語彙が、動詞基本語彙という概念で分類できる。問題は前篇の「聴いた・書いた」と後篇の「頼んだ・書いた・笑った」といった、上記の動詞基本語彙の概念では分類しきれない動詞語彙である。前篇にも後篇にも多用さ

れる「書いた」を例にすると、それは文章の素材による動詞語彙として考えられる。調査した四つの作品では、『暗夜行路』の他に、『和解』では「書いた」が七回使われている。主人公が書くことを職業とするこの二つの作品では「書いた」が多用されることはあるが、『歯車』では一度も使われていなく、『ある一頁』では一例しか見つからない。「書いた」は、作品の素材により使用数が大きく変動しているようで、すべての事件の話をする文章に共通して多用される動詞語彙ではない。『暗夜行路』と『和解』に限って、その素材による、特殊な動詞語彙としてと考えられる。このことは「？語彙」のすべての動詞語彙についても言える。そうだとすると、『暗夜行路』で検証してみた結果、調査した四つの作品に共通して多用されるという意味で、ここでは、「移動語彙・視覚語彙・心情語彙・発言語彙」が動詞基本語彙として確認できたと思う。

二、移動語彙と視覚語彙との関係

以上のように、事件の話をする文章の、主人公の話の筋を調査した結果、四種の動詞基本語彙が存在していることを確認してきた。次に、本稿の主な目的である、この四種の動詞基本語彙が文章の中で、どういう位置関係を持っているかを考察することにより、その相互の関係について考えてみたいと思う。まず、次の三例がある。

例１：或る丘と丘との間のだらだら坂へかかると彼は上から下りて来る男と女の二人連れを見た。(暗夜行路)

例２：流れの早い小川を渡って、四条大橋の一つ下の細長い橋へかかろうという所に彼は幕を張った小さな氷水屋を見つけた。(ある一頁)

例３：彼は知らぬ横町を只、ブラブラと歩く内に、ある広い路に出た。左に八坂神社が見える。(ある一頁)

この三例には、「かかる」「渡って」「出た」という移動語彙があり、主人公の「彼」の位置の変化を示している。その位置の変化と共に、「彼」の目に映ったまわりの情景もどんどん変わっていく。ここでは、視覚の変化が予想されるのである。そして、その新しい環境にある多くの事象の中から、一つの事象を選び出すように、視線の焦点をしぼり、「二人連れを見た」「氷水屋を見つけた」「八坂神社が見える」というかたちで、視覚の変化を

示している。この三例のように、文章の中には、移動語彙と視覚語彙が前後の位置にある例は決して少なくはない。移動語彙と視覚語彙については、その文章中の前後関係から、まず、移動語彙が位置の変化を示し、視覚語彙が視線の焦点をしぼり、一つの事象を選び出す、という特徴が指摘できると思われる。

ところが、移動語彙と視覚語彙の実際の使用数を見てみると、その差は歴然としている。移動により目に入った事象をすべて視覚語彙で表現されるなら、視覚語彙がもっとあってもいいはずである。移動語彙と視覚語彙との組み合わせが動かない現象ではなく、何らかの原因で、その構造が崩される可能性があるということが考えられる。この疑問を解くヒントが次の四例に隠されていると思う。

例４：彼はそれに導かれて庭から直ぐ座敷の方へ行った。裏の松林の上に、大きなバラ色の月が出ていた。(暗夜行路)

例５：なだらかな五条坂を二人はこんな事を云いながら下りて行った。五条の橋はかけ更えで細い仮橋が並べてある。(暗夜行路)

例６：それから彼は町を少し歩いた。或る町角に洋酒食品を売る軒の低い、然し割に品物の充実した店があった。(暗夜行路)

例７：二人は河原を越し、急な坂路を薄暗い森の中へ登って行った。右が金剛院、左が一段高くなって蓮浄院だった。(暗夜行路)

この四例はすべて二文からなっている。前文には「彼」と「彼」を含めての「二人」の位置の変化を示す「行った・下りて行った・歩いた・登って行った」がある。後文には、「月が出ていた・仮橋が並べてある・店があった・左が蓮浄院だった」とあり、いずれも、前文を受けて、位置の変化により分かってきた新しい事象を描写している。この構造を持つ例文については、筆者は「発見」という用法としてまとめたことがあり、ここで詳しく触れることはできないが、要するに、移動語彙を持つ前文が一つのきっかけを作り、「動詞＋ている／てある」「ある」「名詞＋だ」がそれにより発見した事象を描写するとうことである（注６）。

ここで、大切なことは、例１～３の視覚語彙も、例４～７の「発見」の「動詞＋ている」なども、移動語彙に続き現れてきて、移動により分かってきた新しい事象を描写することである。前に述べたように、視覚語彙が視線の焦点をしぼり、一つの事象を選び出すという特徴を持っている。それ

と同じ働きをしているのは、この四例の後文ではないだろうか。例２の「所に」と例３の「左に」が、選び出した事象の位置を鮮明化している。同じく例４、６にも「松林の上に」「町角に」があり、新しい事象の位置が示されている。両方とも新しい事象の出現の描写に関わっている。視覚語彙と「動詞＋ている／てある」「ある」「名詞＋だ」との間に、表現方法の違いが認められるにしても、新しく目にした事象を描写する意味においては、同じ働きを持っている場合があることが言える。この特徴が大切である。これが原因となり、視覚語彙が「動詞＋ている」などに多く置き換えられたため、直接に視覚語彙の使用数の減少につながっているのではないだろうか。このことを裏付ける用例として次の例を挙げてみる。

例８：そして今、彼は何気なくその前へ来ると、毎日は見掛けない若い美しい女の人がその縁で土鍋をかけた七厘の下をあおいでいるのを見た。(暗夜行路)

この例を簡略すると、「彼は～来ると、～見た」となる。「移動語彙・視覚語彙」という文の構造としては例１～３と同じである。ところが、「のを見た」を省略し、「彼は～来ると、女の人があおいでいた」に直してみても文としては成り立つし、同時に例４と同じく「発見」という用法に変身する。逆の場合も同じことが言える。「発見」と思われる例文に「見た」などの視覚語彙を付け加えても差し支えない。例４で直してみると、「彼は～行った。～月が出ているのを見た」となり、別に不都合が生じるわけではない。「見た」などの視覚語彙と「動詞＋ている」などとは、単独でも、併用しても、新しい事象を描写する働きを持っている。文章の中では、このような「動詞＋ている」と視覚語彙と併用する例は実に多く見られる。このことは両者が近い性質を持っていることを示唆しているように思わせる。

三、心情語彙を引き出す動詞語彙

以上、移動語彙と視覚語彙が続いて用いられる観点から、両者が密接な関係を持っていることについて述べた。移動という原因があって、その結果として見た事象を選定し、描き出すという、一種の因果関係が認められるようである。この因果関係が他の動詞基本語彙とどのように関連していくかを考えるために、次の三例を見てみたいと思う。

例９：①謙作は一人船尾へ行って、其処のベンチに腰かけた。②彼は象

頭山、それから、それに連なる山々を眺めた。③彼は今事務長が云った山よりもその前の山がもっと象の頭に似ていると思った。(暗夜行路)

例10：①時々空つばを呑み呑み彼は急ぎ足で歩いて行った。
②幾つ目かの小さい橋を渡って右へ折れると直ぐ、泥堀をへだてそういう家々が見えた。③彼は今更に到頭来たと思った。(暗夜行路)

例11：①彼も一寸手を挙げて、一人先に段々を降りて来た。②そして出ようとすると、彼は其処に若い女が坐っているのを見た。③美しい女だった。④何処か感じのいい処があると彼は思った。(暗夜行路)

例9も、例10も三文で構成されている。例9の文①に「行って」という位置の変化がまず示されている。文②に「眺めた」により「謙作」の視線の焦点がしぼられていく。例10の文①、②に「歩いて行った・折れる」があり、「彼」が動き回っているのを描写している。文②に視線の焦点を示す「見えた」がある。この二例においても、例1～3と同じような、「移動語彙・視覚語彙」という構造が見られる。例11については、文②を解説する文としての文③があることに、例9、10と違いが見られるだけで、文①、②の「移動語彙・視覚語彙」という構造に違いがあるとは思えない(注7)。ここで注目したいのは例9、10の文③と例11の文④である。何れも「謙作(彼)」の気持を示す、心情語彙の「思った」が用いられている。この三例では、「移動語彙・視覚語彙」だけではなく、それに心情語彙が加わって、「移動語彙・視覚語彙・心情語彙」という順序を持つ構造が見られるのである。

事件の話をする文章の場合、その骨組みとも言える主人公の話の筋において、移動語彙・視覚語彙・心情語彙の出現順序から、次の論理性が上記の三例の構造を持つような例文に求められると思う。移動語彙が位置の変化を示す同時に、新しい事象を引き出す一つのきっかけを作る。それにより多くの事象が目に入るが、視覚語彙がその中から、余計な要素を排除し、必要な事象だけを取り立てる。それを受けて、ある気持が生じてくる。心情語彙がその気持を描き出す。文章の中では、移動語彙と視覚語彙の組み合わせが、心情語彙を引き出すことがあることが言えるようである。

移動語彙・視覚語彙・心情語彙の出現順序により、ある論理性が文章に存在していることが認められよう。しかし、実際の文章では、その論理性は多くの表現方法で表されている。それを細かく分析することが当面の問題ではないので、一例だけを取り上げ、その多様性を見てみることに止まることとする。

例12：①和服の上に外套を羽織って、甲板へ出た。②夕方の曇った灰色の空に富士山がはっきりと露われていた。③それが、海を手前に、伊豆の山々の上に聳えた立った工合が如何にも構図的で、北斎のそう云う富士を憶い出さした。（暗夜行路）

この例は三文から構成されている。文①では位置の変化、文②では目にしたある事象、文③ではそれにより生じた気持がそれぞれ描写されている。一見して例9～11と似た構造を持っているように見えるが、その表現方法に違いが見られるのである。まず、前にも述べたように、文②に視覚語彙の代わりに、「動詞＋ている」が用いられている。また、文③は「それが～憶い出さした」とあり、主人公の気持を描いてはいるが、主人公の話の筋としては考えがたい。文③のように、主人公の話の筋ではない文が主人公の気持を表す例は実に多く存在するのである。このことは文章の恣意性と多様性を物語っているように感じさせる。

以上、心情語彙を引き出す動詞語彙として、移動語彙と視覚語彙とを一つの組み合わせとして見てきたが、視覚語彙だけが心情語彙を引き出す場合ももちろんある。一例だけを挙げて見る。

例13：謙作は直子を再び見て、今まで頭で考えていたその人とは大分異う印象を受けた。（暗夜行路）

この例に「見て」という視覚語彙があり、それにより、「印象を受けた」という気持が「謙作」に生じた。場所の変化を示す移動語彙がなくても、視覚語彙だけでも、心情語彙を引き出すことができるのである。

心情語彙に関しては、本論文と注目した例文の特徴が違うが、永尾章曹氏が「思った」の特徴について、「何かがあって、それを受けてということが見逃せない」と述べている（注8）。上記の五例では、移動語彙・視覚語彙の組み合わせと、視覚語彙とが「思った」などの心情語彙を引き出すことがあるため、永尾氏の言う「何か」に当たると思われる。これだけではない。その「何か」に相当するものとして、次の発言語彙もあると考えら

れる。

例14：①食事中、お栄は「不良少年なんて、一人出掛けて心配ないの？竜岡さんに一緒に行って頂くがよかないの？」と心配そうに云った。

②彼はそうそうと思った。（暗夜行路）

例15：①緒方は赤坂の或る芸者との関係で散々面倒があって、今は抱主をせかれていると云う話をした。②謙作は緒方がそのごたごたに対して少しも逃げる態度なしに、同時に力んだ気持もなしにいる所を面白く思った。（暗夜行路）

この二例の文①には主人公以外の人物の発言がある。「云った」と「話した」がそれである。それを聞いた主人公にある気持が生じ、文②の「思った」がそれを表している。ここでは、発言語彙が永尾氏のいう「何かがあって、それを受けて」の「何か」に相当し、心情語彙がそれを受けるということが考えられる。逆に言えば、移動語彙・視覚語彙と同じように、発言語彙が心情語彙を引き出す場合があると考えられるのである。

おわりに

永尾章曹氏は1993年に表現語彙論の可能性を指摘し、「語彙の意味に関する研究を、言語表現についての研究に進めるための手掛かりを求める」ために、文章構成上の絶対必要要素としての話の筋について考察を行っている（注9）。その考察により、心情語彙と発言語彙の存在と文章中における特徴的な用法をも指摘している。本論文はその延長線に立ち、主人公の話の筋を調べ、四種の動詞基本語彙というのを確認した上、その文章中においての、相互関係の一側面について考察結果を述べてきた。

事件の話をする文章というのは、一回限りの事件を述べる文章である。事件がどう展開するか、主人公がどんな行動を取るかは予測不可能であるし、話の筋に規則性が見つからなくても不思議ではないと思われた。しかし、実際四つの作品を調べてみた結果、ある程度の特徴的な使い方が存在していたことが分かったのである。

まず、移動語彙と視覚語彙が密接な関係にあることが特徴的である。移動語彙というのは、事件の話の舞台を変える役割にとどまり、新しい事象を登場させるには及ばない。そこで、視覚語彙の力を借り、新しい環境に

ある多くの事象から、必要な要素だけを取り出す。しかしこの場合、視覚語彙の働きに代わり、「動詞＋ている」などが多用されるので、視覚語彙の使用数が減少する結果になる。

また、動詞基本語彙の中に、調査した四つの作品のどれを取って見ても、最も多用されるのは心情語彙である。例えば『暗夜行路』の前篇では、「思った」が何と108回も使われている。その使用数とも関連するように、移動語彙・視覚語彙という組み合わせも、視覚語彙だけでも、そして、主人公以外の人物に使われる発言語彙も、心情語彙を引き出すことがある。移動語彙・視覚語彙・発言語彙が、ある気持を引き起こす、一種のきっかけを作るというところに共通点が認められよう。そのきっかけを受けての気持を描写するは心情語彙である。比喩的に言えば、移動語彙などは心情語彙の引き金のような存在で、心情語彙は移動語彙などの受け皿のような役割を果たしているということであろう。

言うまでもなく、本稿で取り上げた例文は最も典型的なものにすぎない。実際の文章では、動詞基本語彙がいつもきれいにかたちが整っているとは限らない。様々な書き方がされている。幾つかの移動語彙を並べる場合もあるし、視覚語彙の代わりに、「動詞＋ている」などが用いられたり、視覚語彙と「動詞＋ている」などが違う文で並べて違う事象を取り上げたりする場合もある。また、心情語彙の代わりに、例12のように主人公の話の筋として認めがたい「憶い出さした」で主人公の気持を表すこともある。その様態は実に多様である。これは正に文章が生きているということを物語っているほかない。かたちはどうであれ、動詞基本語彙に存在する順序という特徴と、その順序が持っている事件の話をする文章における論理性は否定できないと思う。

今後の課題として、事件の話をする文章においては、四種の動詞基本語彙それぞれがどういう用法を持っているか、それらが文章の成立するのに、どういう役割を果たしているかということについて考察を重ねる必要がある。この四つの動詞基本語彙の個々の用法と、本稿で述べた相互の関係という二つの方向から考察を続けた上、二つの考察結果を併せて考えることにより、事件の話をする文章の構成についての基礎研究はもちろん、表現語彙論の一部分としての動詞基本語彙論という分野も確定できると気がするのである。

注

1　永尾章曹「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」(『近代語の成立と展開　継承と展開2』山内洋一郎・永尾章曹編　和泉書院1993年）では、初めて「表現語彙論」の概念と研究方法が論じられた。尚、引用は136頁からである。

2　永尾章曹「描写と説明について」(『小林芳規博士論文退官記念』国語学論集1992年汲古書院）717頁によると、「文章は、大きく分けて、まず、事件の話をする文章と、話し手の思いを述べる文章との二つに分けることができる」。又、「事件の話をする文章」については、永尾氏が「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」139頁で次にように述べている。「事件の話をする文章は、特定の時の、時の持続に従って変転を続けている事件の話をする文章である」。

3　文章における「話の筋」の検証方法については、永尾氏が「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」140頁で、次のように述べている。「文と文との間に、時の経過を示す句や文を置いて、文と文との繋がりが成り立つか、成り立たないかを確かめ、成り立つ場合に、その繋がりを話の筋とし、成り立たない場合には、それを話の筋以外の要素と認めようというのである」。

4　王世和「動詞基本語彙に関する一試論――表現語彙論のために――」(『国語国文学論集』第28号1998年1月)。

5　王世和「動詞基本語彙に関する一試論――表現語彙論のために――」では、文章の内容により異なった動詞語彙が多用される場合があるが、しかしそれは、すべての文章に共通して多用される動詞語彙ではないため、動詞基本語彙として認められないということについて述べている。また、「発言語彙」が場合により省略されることがあるについても説明している。

6　王世和「『動詞＋ている』と発見」(『日本語文学国際会議論文集』1998年3月）

7　文章中における「解説」という用法について、永尾章曹『国語表現法研究』29～35頁では、「解説表現」として取り上げられている。又、永尾章曹「『動詞＋ている』の用法について」(『国文学攷』1983年12月）18頁と王世和「『動詞＋ている』の一用法としての『解説』について」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第3集1998年3月）でも詳しく述べられている。

8　永尾章曹「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」170頁。

9　永尾章曹「文章と語彙――表現語彙論のための一つの試み――」169頁。